

通巻 500号記念

書字方向から見る 平和問題

西山 豊

1 アラビア語は右から左に

英語は左から右に書くが、アラビア語は右から左に書く。私がこのことを初めて知ったのは2003年、アメリカがイラクに対して先制攻撃をした頃だった。イラク戦争の状況を伝えるテレビのニュースの中で、中東のカタールに本社がある衛星放送局アルジャジーラからの映像は、テロップが左から右に流れていた。英語は左から右に書くから、テロップは右から左に流れる。英語のテロップの流れに慣れている中、いきなり左から右に流れるテロップを見て、イスラム文化にある種の違和感を覚えた。

イスラム文化圏では文字の書き方が右から左に向かう。アラビア語(エジプト、イラク)、ヘブライ語(イスラエル)、ペルシャ語(イラン)、ウルドゥー語(パキスタン)、パシュトゥー語(アフガニスタン)などがそれで、右から左へだけでなく、すべての文字が左右反転している。アラビア語とヘブライ語は書く方向は同じであるが、疑問符はアラビア語が「؟」で、ヘブライ語が英語と同じ「?」である。

私のライフワークのひとつにブーメラン研究がある。ブーメランの楽しさをひとりでも多くの人に知って欲しいという願望から紙製ブーメランの解説書を作成し、趣味が高じて解説書を公用語の69言語に翻訳し、そのホームページを公開した。興味がある方はつぎのURLを参照してください。

<http://www.kbn3.com/bip/index.html>

各言語に翻訳する中で、私は書字方向と文字に興味を持った。書字方向とは文章を書く字の方向のことをいう。英語、ドイツ語、フランス語、スペイン語、ロシア語などヨーロッパ言語は左から右に書く。中国語(簡体字)、韓国語(ハングル文字)、ヒンディー語(デーヴァナーガリー文字)、タイ語(タイ文字)などアジア言語の多くは独自の文字を持っているが、書く方向は英語と同じく左から右である。

アジア・アフリカではヨーロッパの植民地政策により母国の文字が失われた国がある。ベトナム語はフランスの植民地時代にフランス語表記に置き換えられたし、モンゴル語は旧ソ連邦下であり、ロシア語と同じキリル文字に統一させられた。タガログ語、インドネシア語は英文字の表記であり、ここに言語の侵略性というものを強く感じた。日本語は漢字を大陸から輸入し、ひらがなを独自に開発して築いた誇れる文化でもある。

2 すべてが存在したヒエログリフ

書字方向は大きく分けて横書きと縦書きがある。横書きは右から左に書くのを(1)右横書き、左から右に書くのを(2)左横書きと呼ぶ。さらに、右横書きの場合は文字自体が左右反転しているのが特徴である。フェニキア文字は右横書き専用であったが、ギリシャ文字は右横書きと左横書きを混用し、時には(3)牛耕体といって行の折り返しごとに書字方向が逆になることも行われた。

右横書きには(1)とは違って文字が左右反転しない(4)型がある。これは戦前の日本にみられた。しかし、これは右横書きと見るのではなく1行1文字の縦書きと見るべきであるとの見解がある。また、横書きには珍しい(5)特殊型がある。イースター島のロンゴロンゴ文字で上下反転混合文字になっている。

縦書きは右から左に行が進む(6)右縦書き

と、左から右に行が進む(7)左縦書きとがある。この場合、(6)は文字が左右反転している。漢字は右から左に行が進む右縦書きであるが、文字が反転しない(8)型である。モンゴル文字は(9)左縦書きの特殊な書字方向をしているが、歴史をさかのぼるとイスラム教の影響を受けたウィグル文字が90度左回転してできたものである。

文字の歴史は、メソポタミア文明のシュメール文字(紀元前3500年頃)が最古と言われている。粘土板に葦の尖筆を押し当ててくぼみをつけることによって文字を記す楔形文字で、縦書きと横書きの両方が存在したようである。古代エジプトのヒエログリフ(聖刻文字、紀元前3000年頃)は横書き(1)と(2)と縦書き(6)と(7)が存在し、文章の向きは人や動物の鼻の向きで決まる。

この中で右から左の右横書きが進化していく。右横書き優位についてはつぎのような仮説がある。左手に鑿、右手に鋸を持って聖刻文字を石盤に刻んだので、前に刻んだ文字が左手に隠れないようにするために右から左の方向へと進んだとするものだ。この場合、文字が左右反転している理由もわかる。アラビア人は左利きが多く、ヨーロッパ人は右利きが多いというのは大いなる誤解で、人類はどこでも右利きが多く、左手に鑿、右手に鋸を持っているから右横書きになったと考えられる。

右横書き優位はフェニキア文字(紀元前1500年頃)に引き継がれる。アラビア語など中東イスラム社会はこの伝統を現在も引き継いでいる。フェニキアを経て古代ギリシャ文字(紀元前800年頃)になると右から左、左から右の両方が存在していた。やがて左横書きが優位になる。ローマ時代になると新しい国家建設という意味で言語、度量衡、宗教、文化のすべてをエジプトと異なるようにするた

め、その一環として左から右の左横書きに定めるようになったのではないだろうか。

3 対立物を止揚する弁証法

中国古代文字の最初は甲骨文字(紀元前1400年頃)で、これはすでに縦書きである。古代中国では竹簡または木簡を使っていて(紀元前1300年ごろ)、その上に一行分の文字列を書き、上と下で綴じて巻いて保管した。これを読む時は左手で竹簡の巻いたものを持ち、右手で順番に竹の棒を引き出して行った。

竹簡から紙に移っても、巻物形式で保管すると、文字の縦書き列が右から左に出てきた方が見やすい。巻紙に筆で書く場合、左手に巻紙を持って右手の筆で書き進めると、左手で巻紙を調整して新しい空白部分を出し、書いた部分は右にたらずか床に置いて墨の乾燥を待つのが自然である。このように右から左へ進む右縦書きが主流になったことが推測できる。漢字の右縦書きも右利きが重要な鍵になっている。

英語の左から右とアラビア語の右から左は書字方向の矛盾である。矛盾をひとつに統一しようとしてもそれはできない。転じて、現在の欧米諸国とイスラム諸国の関係はこの矛盾の関係にあるとも思える。矛盾を解決するためどちらかが相手を征服しようとするのは暴力の連鎖につながり、根本的な解決にはならない。この矛盾を解決するのは矛盾が存在すること自体を互いに認めること、そして矛盾を止揚する弁証法の哲学が必要ではないだろうか。キリスト文明が勝つかイスラム文明が勝つかではなく、どちらも勝たないしどちらも負けない。非戦すなわち日本国憲法九条の精神が止揚になるのではなかろうか。

参考文献

西山豊:「書字方向の数理」『理系への数学』現代数学社、2008年10月号。

(にしやま・ゆたか:大阪経済大学、数学)